

多施設の糖尿病患者コホートをを用いた Diabetic Kidney Disease の実態および発症・進展因子の解明

博士課程 4 年 吉田唯

国内の糖尿病の罹患率は増加傾向にあり、合併症として腎障害を生じる患者も増加し、1998 年以降は透析療法導入における原疾患の 1 位を占めている。

これまで糖尿病性腎症と定義されてきた腎障害の発症パターンと異なり、アルブミン尿に比して GFR の低下が先行して生じる群についての報告が近年多く、米国ではアルブミン尿 $\geq 30\text{mg/gCr}$ または $\text{GFR} < 60 \text{ mL/分/1.73m}^2$ の群は Diabetic Kidney Disease(DKD)と定義され、糖尿病患者の 34.5%を占めることが明らかとなった。ただ、この DKD の定義については全世界でコンセンサスが得られているものではなく、本邦でも糖尿病患者全体を対象とした DKD の割合を調べた大規模な研究は存在しない。このため、本研究にて既存のコホートを統合し、本邦での DKD の存在割合・発症及び進展の背景因子を解析するとともに、DKD の中には早期から GFR の急速な低下を生じる一群(Early Decliner)があり、この群の特徴や割合、急速な GFR 低下に関連する因子を解析した。

前回の発表に加え 2 施設のデータが新たに加わり、全例腎生検を行っている 2 施設を除いたデータを用いて DKD の割合、背景因子を解析した。また、Early Decliner に関しては trajectory 解析を用いて GFR 低下速度により 3 群に分け、さらに急速低下群に関してのリスク因子を算出した結果を報告する。

参考文献 : Ian H. de Boer, MD, MS, Tessa C. Rue, MS, Yoshio N. Hall, MD, Patrick J. Heagerty, PhD, Noel S. Weiss, MD, DrPH, Jonathan Himmelfarb, MD. Temporal Trends in the Prevalence of Diabetic Kidney Disease in the United States. JAMA. 2011;305(24):2532-2539. 等